

中柳投手

甲山 羊二

リビングではテレビとラジオの多重音声による実況が響いていた。タイガース対ドラゴンズ。前半戦最後の三連戦初戦。三回の裏のタイガースの攻撃中。二点リードで追加点のチャンス。しかし鳥谷凡退。テレビの画面はその様子をあっさり映していたが、音声は違った。ひとつは叫ぶ実況で、もうひとつは諦めの実況。そしてそれぞれがすぐにCMに変わった。

自称タイガースファンの親父はここで目覚める。いつものことだ。多重音声の中、試合開始と同時のソファアードのうたた寝。目覚めはおよそ三回が終了する時刻。選手名があやふやで、試合が相手ベースになるとすぐ弱気になる。「もうあかん。もう負けや」

自称タイガースファンについて、家族が疑問視する理由はこのあたりにある。

CMが終わって画面には今日の先発の下柳が映し出された。ぼんやりした目で画面を見ながら、親父のお決まりの台詞が飛び出した。

「今日の先発誰やった」

目の前にいるではないか。僕はラジオの音声が消してからこう答えた。

「今日は中柳やったぞ」

キッチンから妻と中二の娘の小さな笑い声が聞こえてきた。けれど親父にはそれが聞き取れなかったらしい。

「中柳……」

親父のお得意の独り言が始まった。

「パパ、違うって。今日は上柳やったやん」

娘が参戦してきた。それでも親父の独り言は止まない。これで今日の先発は中柳に決定した。中柳は訳あってすでに降板。画面の向こうで力投している下柳は二番手ということになる。ある日、いつものようにその日の先発を聞かれて、その時は「江夏や」と答えたが、すぐに「どうに辞めとるぞ」とあっさりかわされたことがあった。それ以来三回終了までに活躍する闇の選手が、僕と娘によって次々に生まれていった。結局、親父の独り言は五回終了まで止まなかった。

試合は進んだ。そしてタイガース二点リードのまま最終回へ。抑えの藤川が最後のバッター井端を三振に仕留め試合終了。タイガースの勝利を確認した親父は、満足そうな表情で妻と娘それぞれと握手を交わすと、明日からの検査入院に備えてか、洗面所を経て自分の寝室にさっさと引き上げてしまった。

一〇月が来ると親父はちょうど八〇になる。お袋が死ん

でふさぎ込んでいた時期もあったが、それでも朝の散歩を欠かさず、体力には相当に自信があった。それが最近起こった軽いめまいによって崩れかけていた。そこで親父は通院ではなく一週間の検査入院を勝手に決めてきたのだった。

翌日、仕事を終えた僕は病院へと向かった。病室は六人の相部屋だった。その右手奥の窓際には、ベッドに腰掛けられている親父の背中と、荷物入れ兼用の長椅子に座っている妻と娘の姿があった。三人は熱心に小型テレビに見入っていた。画面には、試合前の甲子園球場と今日の先発の安藤が映っていた。僕も長椅子の端に座り、家族での野球観戦が始まった。試合はタイガースペースで進み、三回を終了したところでドラゴンズ相手に六点リードしていた。親父は上機嫌だった。うたた寝もなかった。

面会終了時刻が迫っていた。帰り間際、娘が親父に「おじいちゃん、昨日の先発覚えてる」と聞いた。親父は微笑みながら「中柳やる」と答えた。そこで僕はすかさず親父に言った。

「違うがな。上柳やがな」

「いや、中柳やった。わしちゃんと覚えとる」

親父は自信満々だった。僕の中で張り詰めていた気持ちが急に緩んだ気がした。親父の退院が待ち遠しくなった。
